



華麗なる図書館利用者のための

Cool Librar

クールリブラ

講座

カジのひねもすハイスクール純情派

文/カジ

ガングロブームが来たり、美白ブームが来たりと
世の中白黒つけたがる人が実に多いね。

「前回までのあらすじ」

高校1年の初めての文化祭。なんやかんやでおもしろ劇的なやつに参加することになったカジ少年のだが、原住民という全く重要ではない役をやるハメに。

主人公の太郎くんが世界中を飛び回るストーリーに、後から追加されたどうでもいい役。人数合わせで作られたこの役を自分はどうもモチベーションで演じればいいのか。なんてことはあまり考えず、どうせなら楽しくやってしまおうと珍しく前向きなカジであった。とはいえ、セリフは「ウンボウンボ」のみ。無条件にこれを楽しんで演じるのは中々のアレだ。

「次は顔に塗ってみて！」

と笑顔のカジにひとみ先輩が：

「結構茶色くなりませぬ！」

「原住民役はこれを肌に塗るんだよ」と手渡されたのは茶色えのぐ。原住民は茶色の肌というのは実に短絡的なアレだが、なるほど本格的にやるんだなあ。

「じゃあ、塗ってみて」

「え？今からですか？」

「そう、今から！」

マジか。まだ練習段階、ていうか初めての練習だぞ。今日塗る必要があるのかよ。複雑な気持ちでキャップを開け、少量のえのぐを手にとり腕にそっと付けてみる。ぬるい。スイスイとえのぐを伸ばすと程よく茶色になっていく。ほお小麦色の肌の完成だわ。これはこれで面白い。

え？何も今日顔に塗らなくてもねえ。これはさすがに冗談かと思いきや：

「嫌なの？カジくんやる気あるの？」

いやまあ、やれと言われればやりませうどね。ししが顔にえのぐを付けていくカジ。ああこれどんな感じになってんだろうなあ。松崎かなあ。しげるかなあ。黙々とえのぐを付けること数分。だいたい万遍なく塗れたようだ。と、突然大爆笑するひとみ先輩。

「本当に顔に塗ったんだね？かわいい！」

ああ!? 冗談で言っただんかいな！ 年上女子に弄ばれるカジなのであった。

ひとみ先輩について

本文中に登場するひとみ先輩。いじわるな描写がされているが、実際いじわる。ただし、かなりの美貌であり、正直言えはいじわるされて嫌な気はしなかった。もっと正直に言えば、むしろ嬉しかったし、年上のキレイな先輩にメロメロだった。ただし、カジの心の中には常に笑顔の千絵ちゃんがいたと断言しておく。

